

# 愛媛県東中予方言における 2 字漢語 アクセントの世代差

秋 山 英 治

## 1. はじめに

京都方言など〈式〉を有する京阪系諸方言の特徴の1つとして、複合語を形成する場合、前部要素の〈式〉を保持するという「式保存規則」（複合語アクセント規則）があることが知られている。しかし、この「式保存規則」は、すべての複合語にあてはまるわけではない。小川晋史（2006）によれば、京都方言の2字漢語において、「式保存規則」が成り立たず、〈下げ核〉の有無が後部要素の拍数によって決まる傾向があること、〈式〉が前部要素の拍数によって決まる傾向があることを報告している。この小川晋史（2006）の報告が、京都方言以外の〈式〉を有する方言においてもあてはまるものであるかを検証するため、秋山英治（2018）において、愛媛県東中予方言として、京都方言と同じ「中央式」の松山市・今治市の2地域をとりあげ、〈式〉を有する老年層の調査結果について考察をおこなった。その結果、松山・今治（京都方言も含む）では、小川晋史（2006）の報告とは異なり、〈下げ核〉の有無が前部要素と後部要素の音節構造の組み合わせによって決まる傾向があること、〈式〉の決定に前部要素の音節構造が関与していることが明らかになった。

本稿では、秋山英治（2018）をもとに、松山市・今治市の2地域における若年層の調査結果について、老年層の調査結果（秋山英治（2018））と比較分析をおこなう。松山市・今治市の若年層では、共通語化によって〈式〉を消失している（曖昧化している）ことから、〈式〉を有する老年層と〈式〉を有さない若年層との比較分析をおこなうこととなる。

## 2. 調査の概要

松山市・今治市の若年層として、以下の2人の話者に、調査票を読んでもらう「読ませる調査」をおこなった。話者の氏名・生年・性別（男性をm、女性をfとする）・調査年月の順に示す。なお、個人情報の観点から、話者の氏名をイニシャルで示す。

松山市 O・T氏 1994年生まれ m 2017年6月  
 今治市 S・Y氏 1996年生まれ f 2017年6月

松山市のO・T氏、今治市のS・Y氏ともに、共通語化が起きているが、共通語化の進行度に差がある。

〈式〉についてみると、松山市のO・T氏は、共通語化によって、完全に〈式〉が消失している。松山市における〈式〉が消失する過程について述べた秋山英治(2017a)のタイプ④「〈式〉の機能を消失したタイプで、無核語の句頭が低く始まるタイプ」になる。一方、今治市のS・Y氏は、一聴すると、〈式〉が残存しているようである。しかし、単語単独では、低く始まる低起系列の音調でありながら、「この」などの先行の文節には高く付く音調(低接性が失われた音調)が聴かれる。もともと愛媛県東中予地方の低起系列の〈式〉は、〈低接上昇式〉で、〈式〉を有する老年層においても、「高平調」や「中平調」が聴かれることがあるが、S・Y氏には老年層以上に「高平調」「中平調」が多く聴かれる。つまり、低起系列の特徴である上昇性が失われているということである。よって、S・Y氏は、秋山英治(2017a)のタイプ②「〈式〉の機能が曖昧になっているタイプ」になる。タイプ②は、〈式〉が消失している渦中であり、完全に消失したわけでないが、〈式〉の機能が低下している(機能していない)ことから、〈式〉を有しないものとして扱う。

類別体系(2拍名詞)についてみると、松山市のO・T氏、今治市のS・Y氏ともに、1/2・3/4・5(秋山英治(2017a)のDタイプ)で、類の対立関係は同じである。しかし、具体的な型については、O・T氏が、1(0型)/2・3(2型)/4・5(1型~2型)、S・Y氏が、1(0型)/2・3(1型)/4・5(1型~2型)で、第2・3類が違う<sup>1)</sup>。O・T氏の2型は共通語型で、完全に共通語化しているのに対して、S・Y氏の1型は、今治市をはじめとした愛媛県東中予地方の「中央式」の伝統的な型である。つまり、S・Y氏では、第2・3類に共通語化が起きている(古形を保持している)ということになる。

以上、松山市のO・T氏の方が、今治市のS・Y氏より共通語化が進行している。秋山英治(2017a)では、愛媛県東中予地方において、松山市の周辺部に古形が残存していることを述べたが、若年層の共通語化の進行についても、松山市の周辺部は進行が遅いという傾向がある。世代を超えて、松山市の周辺部は、古形を保持しやすいということがわかる。

調査においては、漢語1300語余を中心に、複合語に関するものなど、合計2500語余を調査しているが、本稿では、秋山英治(2018)と同じ370語の2字漢語を分析の対象とする<sup>2)</sup>。分析では、個々の語についてもみていくべきであるが、特徴的な場合の

み指摘するにとどめ、本稿では統計的な視点から分析をおこなうこととする。

若年層で共通語化が起きているということから、共通語のデータとして、平山輝男編『全国アクセント辞典』（東京堂、1960年、第26版）（以下、「共通語（1960）」）所収の共通語（東京）、金田一春彦監修・秋永一枝編『新明解日本語アクセント辞典 第2版』（三省堂、2014年）（以下、「共通語（2014）」）をとりあげる。

本稿で用いる表記は、以下の通りである。

H：高い音調

L：低い音調

0・1・2……：〈下げ核〉の位置（0は〈下げ核〉がない無核をあらわす）

重：重音節

軽：軽音節

#：形態素境界

### 3. 分析結果

#### 3. 1 分析結果の概要

上述したように、松山市・今治市の若年層では、〈式〉が消失している（曖昧化している）ことから、〈下げ核〉の有無（〈下げ核〉がある場合、どこにあるのか、その位置）について分析することになる。結論からいうと、一部例外の語もあるものの、3・4拍語ともに、大半の語が、松山市・今治市の若年層、松山市・今治市（京都方言）の老年層、共通語（共通語（1960）・共通語（2014））すべての地域・年代で同じである（詳しくは、末尾・資料編を参照されたい）。つまり、松山市・今治市の若年層では、〈式〉・類別体系において、変化（共通語化）を起こしたのに対して、2字漢語（〈下げ核〉の有無（位置））においては、変化（共通語化）を起こさなかったということになる。変化（共通語化）を起こさなかったのは、もともと松山市・今治市の老年層において、共通語と〈下げ核〉の有無（位置）が同じであった（変化（共通語化）を起こす必要がなかった）からである。

松森晶子（2002）によれば、「外来語アクセントは、方言差が激しい和語と異なり全国的に同じような規則に従うという「仮説」がある」ことを述べている。松山市においては、秋山英治（2017）で、〈式〉を有する話者・〈式〉を消失した話者ともに、外来語アクセントの〈下げ核〉の有無（位置）が、京都方言・共通語と似ていることを述べた。本稿の結果も併せると、外来語だけでなく、漢語（2字漢語）においても、「全国的に同じような規則に従う」可能性が考えられる<sup>3)</sup>。このことは、通時的にひじょうに重要な問題であるが、調査地点が限られており、全国的なこととして述べることはできないため、本稿では、可能性の指摘にとどめる。

松山市・今治市の若年層（老年層も）において、〈下げ核〉の有無（位置）が、基

本的に共通語と同じことから、共通語（東京方言）の2字漢語について報告した小川晋史（2010）<sup>4)</sup> にならい分析していく。

### 3. 2 3拍語の場合

#### 3. 2. 1 後部要素別にみた結果

小川晋史（2010）では、後部要素の拍数によって、〈下げ核〉の有無（位置）が決まる傾向があることを指摘していることから、後部要素が1拍の場合と2拍の場合にわけて分析する。松山市・今治市の若年層の結果を示すと、以下の【表1】【表2】のようになる<sup>5)</sup>。

【表1】3拍語・後部要素1拍

	有 核		無 核	合 計
	1型	2型	0型	
松 山	43	0	34	77
	55.8%	0.0%	44.2%	100.0%
今 治	43	1	34	78
	55.1%	1.3%	43.6%	100.0%
共通語 (1960)	48	5	37	90
	53.3%	5.6%	41.1%	100.0%
共通語 (2014)	47	3	42	92
	51.1%	3.3%	46.7%	100.0%

【表2】3拍語・後部要素2拍

	有 核		無 核	合 計
	1型	2型	0型	
松 山	8	1	46	55
	14.5%	1.8%	83.6%	100.0%
今 治	9	1	44	54
	16.7%	1.9%	81.5%	100.0%
共通語 (1960)	8	2	46	56
	14.3%	3.6%	82.1%	100.0%
共通語 (2014)	8	2	45	55
	14.5%	3.6%	81.8%	100.0%

【表1】【表2】より、後部要素が1拍の場合も、また2拍の場合も、松山市・今治市の若年層、共通語（1960）・共通語（2014）すべてにおいて、大きな違いがない、つまり地域差がないことがわかる。

後部要素が1拍の場合、松山市・今治市の若年層、共通語（1960）・共通語（2014）すべてにおいて、有核（そのうち大半が1型）が55%程度、無核が45%程度で、やや有核の比率が高い。この結果は、松山市・今治市（京都方言）の老年層の結果と同じである（秋山英治（2018））。

後部要素が2拍の場合、松山市・今治市の若年層、共通語（1960）・共通語（2014）すべてにおいて、有核が20%弱、有核が80%強で、有核が多い。この結果も、松山市・今治市（京都方言）の老年層の結果と同じである（秋山英治（2018））。

よって、後部要素が1拍の場合、2拍の場合ともに、松山市・今治市の若年層と老年層は同じ結果であることがわかる。

#### 3. 2. 2 音節構造別にみた結果

音節構造別に、松山市・今治市の若年層の結果を示すと、以下の【表3】【表4】

のようになる。

【表3】3拍語・後部要素1拍・音節構造別

		有 核		無 核	合 計
		1型	2型	0型	
松 山	重#軽	33	0	27	60
		55.0%	0.0%	45.0%	100.0%
	輕輕#輕輕	10	0	7	17
		58.8%	0.0%	41.2%	100.0%
今 治	重#軽	32	0	28	60
		45.0%	0.0%	46.7%	100.0%
	輕輕#輕輕	11	1	6	18
		61.1%	5.6%	33.3%	100.0%
共通語 1960	重#軽	38	0	28	66
		57.6%	0.0%	42.4%	100.0%
	輕輕#輕輕	10	5	9	24
		41.7%	20.8%	37.5%	100.0%
共通語 2014	重#軽	37	0	31	68
		54.4%	0.0%	45.6%	100.0%
	輕輕#輕輕	10	3	11	24
		41.7%	12.5%	45.8%	100.0%

【表4】3拍語・後部要素2拍・音節構造別

		有 核		無 核	合 計
		1型	2型	0型	
松 山	軽#重	6	1	27	34
		17.6%	2.9%	79.4%	100.0%
	軽#輕輕	2	0	19	21
		9.5%	0.0%	90.5%	100.0%
今 治	軽#重	6	1	26	33
		18.2%	3.0%	78.8%	100.0%
	軽#輕輕	3	0	18	21
		14.3%	0.0%	85.7%	100.0%
共通語 1960	軽#重	6	2	27	35
		17.1%	5.7%	77.1%	100.0%
	軽#輕輕	2	0	19	21
		9.5%	0.0%	90.5%	100.0%
共通語 2014	軽#重	6	2	26	34
		17.6%	5.9%	76.5%	100.0%
	軽#輕輕	2	0	19	21
		9.5%	0.0%	90.5%	100.0%

【表3】【表4】より、すべての音節構造で、松山市・今治市の若年層、共通語(1960)・共通語(2014)すべてにおいて、大きな違いがないことがわかる。

後部要素が1拍の場合、今治市の「輕輕#輕輕」では有核が70%弱で、他の地域よりやや比率が高く、違う傾向を示しているが<sup>6)</sup>、その他の音節構造については差がなく、「重#軽」「輕輕#輕輕」ともに、松山市・今治市の若年層、共通語(1960)・共通語(2014)すべてにおいて、有核(そのうち大半が1型)が55%程度、無核が45%程度である。有核の比率がやや高いものの、有核と無核がほぼ2分している状態である。この結果は、松山市・今治市(京都方言)の老年層の結果と同じである(秋山英治(2018))。

後部要素が2拍の場合、松山市・今治市の若年層、共通語(1960)・共通語(2014)すべてにおいて、「軽#重」「軽#輕輕」ともに、無核の比率が高い。とくに、「軽#輕輕」にその傾向があり、無核の比率が90%程度で、「軽#重」より10~15ポイント程度高い。この結果は、松山市・今治市の老年層の結果と同じである(秋山英治(2018))。

以上より、後部要素が1拍の場合、有核が無核よりやや多いものの、ほぼ2分し、後部要素が2拍の場合、無核になる傾向があることがわかる。これらの結果について、小川晋史(2010)と比較すると、「重#軽」以外の音節構造は、松山市・今治市の若年層、共通語(1960)・共通語(2014)すべてにおいて、同様の結果を示している。小川晋史(2010)によれば、部分的に音節構造別の違いを認めつつも、4拍語の

結果もふまえて、後部要素の拍数によって〈下げ核〉の有無（位置）が決定する傾向があることを述べている。上記の結果（後部要素が1拍の場合、有核と無核がほぼ2分し、後部要素が2拍の場合、無核になる傾向があること）についても、後部要素の拍数によって〈下げ核〉の有無（位置）が決定する傾向があるということができそうに思える。

しかし、「重#軽」について、さらに詳しくみていくことで、後部要素の拍数によって〈下げ核〉の有無（位置）が決定するということがいえないことがわかる。「重#軽」については、上述したように、松山市・今治市の若年層で、有核が55%程度、無核が45%程度で、有核の比率がやや高いという結果である。一方、小川晋史（2010）の報告では、有核が81%、無核が19%となっており、有核・無核それぞれの比率が、本稿の結果と30ポイント程度の差がある。このような差が生じるのは、本稿の調査語数が小川晋史（2010）の調査語数と比較して少ないということも考えられるが、一番の要因は、本稿では、「重#〜」の語として、促音を含む語を分析の対象としているのに対して、小川晋史（2010）では、促音を含む語を分析の対象から外していることがあげられる。小川晋史（2010）によれば、「促音を含む語については、音節構造がH#LやH#LLである語には促音が現れるが、音節構造がL#HやLL#Hである語には促音は現れないというように、出現する位置に非対称性があるので分析から除外した」（小川晋史（2010）の「H」は本稿の「重」を、「L」は本稿の「軽」にあたる）としている。確かに、松山市・今治

【表5】「重#軽」促音除外

	有 核		無 核	合 計
	1型	2型	0型	
松 山	32	0	7	39
	82.1%	0.0%	17.9%	100.0%
今 治	31	0	8	39
	79.5%	0.0%	20.5%	100.0%
共通語 1960	34	0	7	41
	82.9%	0.0%	17.1%	100.0%
共通語 2014	35	0	10	45
	77.8%	0.0%	22.2%	100.0%

市・共通語（1960）・共通語（2014）の「重#軽」の語について、促音を含む語を除外してみると、【表5】のように、松山市・今治市の若年層、共通語（1960）・共通語（2014）すべてにおいて、小川晋史（2010）の結果（有核81%、無核19%）と同様の結果となる。ただし、秋山英治（2018）で述べたように、松山市・今治市（京都方言）の老年層において、前部要素に促音を含む場合は低起系列の〈式〉となり、含まない場合は高起系列の〈式〉となる、つまり前部要素の促音の有無が〈式〉の決定に参与している<sup>7)</sup>。〈式〉を有する諸方言において、どちらの〈式〉となるかは、弁別的な特徴を示すひじょうに重要な点である。このことから考えると、促音を含む語を除外することはできない。松山市・今治市の若年層では、〈式〉を消失していることから、若年層のみ促音を除外するという事も考えられなくもないが、老年層では、促音を含んだ語を分析対象とする一方、若年層では促音を含んだ語は分析対象から除

外するのは、問題である。よって、本稿では、前部要素に促音を含む語についてもとりあげ、分析の対象とした。

松山市・今治市（京都方言）の老年層において、前部要素の促音の有無が〈式〉の決定に関与しているわけであるが、〈式〉を有さない若年層では、前部要素の促音の有無によってどのような状況となるのだろうか。このことを確認するために、「作家（サッカ）」と「作者（サクシャ）」のように、同形態素で促音を含む場合（「重#軽」）と含まない場合（「輕輕#軽」）にわけて調査した。共通語（1960）・共通語（2014）の結果も併せて示すと、【表6】のようになる。

【表6】より、前部要素に促音を含む場合（「重#軽」）、松山市・今治市の若年層、共通語（1960）・共通語（2014）すべてにおいて、85%程度以上が無核となっている。「重#軽」で促音を含む語を除外した結果を示した【表5】では、8割程度が有核（すべて1型）となっており、【表6】と逆の傾向である。この結果から、特殊拍のなかで、促音と促音以外（撥音・長音・二重母音i）とで、〈下げ核〉の有無が異なる（促音を含む場合は、無核となり、促音を含まない場合は、有核となる）ことがわかる。ただし、4拍語では、「重#〜」という音節構造に、上記のような促音と促音以外の対立（異なり）はみられない。

促音と促音以外の異なりが3拍語においてのみにみられるということについては、小川晋史（2010）も指摘しているが、小川晋史（2010）は、上述したように、促音が出現する位置に非対称性があることから、促音を含む語を分析対象としていない。

3拍語において前部要素に促音を含むかどうかで異なりがみられるのは、松山市・今治市（京都方言）、共通語だけではない。松浦年男（2009・2014）によれば、長崎方言の3拍語においても、前部要素に促音を含むかどうかで、トーンがかわることを指摘している。そこで、秋山英治（2018）では、長崎方言、そして長崎方言と同じ二型アクセントの鹿児島方言について、松浦年男（2009・2014）のデータおよび平山輝男編（1960）所収の鹿児島方言を調査し、長崎方言・鹿児島方言ともに、3拍語において、前部要素の促音の有無によってトーンがかわることを確認した。松山市・今治市、京都、共通語（東京）、長崎・鹿児島と、地理的に遠く離れ、またアクセント付

【表6】 促音の有無による状況

		有 核			合 計
		1型	2型	0型	
松 山	促音あり (重#軽)	1 4.8%	0 0.0%	20 95.2%	21 100.0%
	促音なし (輕輕#軽)	9 56.3%	0 0.0%	7 43.8%	16 100.0%
	促音あり (重#軽)	1 4.8%	0 0.0%	21 95.2%	39 100.0%
今 治	促音あり (重#軽)	10 58.8%	1 5.9%	6 41.2%	17 100.0%
	促音あり (重#軽)	4 16.0%	0 0.0%	21 84.0%	25 100.0%
	促音なし (輕輕#軽)	10 43.5%	5 21.7%	8 34.8%	23 100.0%
共通語 1960	促音あり (重#軽)	3 12.5%	0 0.0%	21 87.5%	24 100.0%
	促音あり (重#軽)	10 45.5%	3 13.6%	9 40.9%	22 100.0%
	促音なし (輕輕#軽)	10 45.5%	3 13.6%	9 40.9%	22 100.0%

与システムの異なる地域において、前部要素の促音の有無によって異なりがみられるということは注目される事実であろう。

特殊拍における促音の特異性について、田中真一（2008）は、共通語の外来語・複合名詞の事例から、促音は、他の特殊拍（二重母音i・長音・撥音）と比較して、ソノリティーが低く、「擬似的な軽音節として解釈され核を担いにくい」ということを指摘している。田中真一（2008）によれば、促音を含む重音節が「擬似的な軽音節」となるということから、たとえば「マッハ」を「軽（擬似的）軽」と解釈している。この田中真一（2008）の解釈に従えば、前部要素に促音を含む3拍語は、「軽（擬似的）#軽」ということになる。そこで、松山市・今治市において、2拍語の漢語<sup>8)</sup>がどのような状況にあるのか、老年層の調査結果を確認してみたところ、「輕輕」（例、「画（カク）」）・「軽#軽」（例、「慈悲（ジヒ）」）・「重」（例、「例（レイ）」）すべての音節構造において、有核（主にH1型（1型））が70%程度、無核が30%程度で、有核になる傾向があった。2拍語の大半が、1字漢語（2字漢語が少ない）で、3拍語と事情が違うものの、2拍2字漢語（「軽#軽」）をみると、大半が有核（主にH1型（1型））で、【表6】の結果と異なる。後述するように、促音を含まない場合の「輕輕#軽」の状況と比較すると、促音の有無によって比率が異なる。なぜ前部要素が促音の場合、無核になるのかということについては、現時点で不明であるが、特殊拍において、促音と促音以外で異なる結果を示すことについて、田中真一（2008）の指摘と共通性がみられるということは注目されよう。

3拍語でのみ促音と促音以外とで異なる傾向を示すということについて、田中真一（2008）では、「語末に促音は生起」しないこと、また「次語末より前にその生起する場合は、仮にmMで懷疑的なLが形成されても、もう一方の可能性（Hが形成された場合）と出力形は変わらない」（「L」は擬似的軽をあらわす）ことから、「特殊モーラが次語末を占める場合（--mMm#）においてのみ」みられる現象であることを述べている<sup>9)</sup>。田中真一（2008）では、4拍語においても、促音と促音以外とで異なる傾向を示す例があることを述べているが、それらは漢語ではない。本稿でとりあげる4拍の漢語は、2拍+2拍であることから、次語末に促音（特殊拍）とはなりえない。よって、4拍語では、3拍語のように、促音と促音以外とで異なる傾向を示すことは確認されないと考えられる。

促音を含まない場合（「輕輕#軽」）、松山市・今治市の若年層、共通語（1960）・共通語（2014）すべてにおいて、有核が60%程度、無核が40%程度である。やや有核の比率が高いものの、有核と無核がほぼ2分している。この結果は、【表3】の結果とほぼ同じである。

以上より、3拍語について、音節構造からまとめると、以下のようになる。

【有核になりやすい音節構造】

なし

【有核と無核にはほぼ2分される音節構造】

重#軽、輕輕#軽

【無核になりやすい音節構造】

軽#重、軽#輕輕

3拍語では、有核になりやすい音節構造はなく、有核と無核にはほぼ2分される音節構造（「重#軽」「輕輕#軽」）と無核になりやすい音節構造（「軽#重」「軽#輕輕」）の2タイプがあることになる。ただし、「重#軽」は、上述したように、前部要素に促音を含む場合は無核になり、含まない場合は有核になるという対極的な傾向を示す。そこで、「重#～」について、促音と促音以外にわけて改めて示すと、以下のようになる。

【有核になりやすい音節構造】

重（促音以外）#軽

【有核と無核にはほぼ2分される音節構造】

輕輕#軽

【無核になりやすい音節構造】

重（促音）#軽、軽#重、軽#輕輕

後部要素の拍数によって、〈下げ核〉の有無（位置）が決定する傾向にあるのではなく、音節構造、とくに「重#～」では促音の有無によって〈下げ核〉の有無（位置）が決まる傾向があるということになる。

### 3. 3 4拍語の場合

4拍語は、2拍+2拍であることから、後部要素の拍数別にわけてみることはできない。そこで、音節構造別に、松山市・今治市の若年層の結果を示すと、以下の【表7】のようになる。

【表7】より、比率については、音節構造・地域によってやや異なりがみられるものの、すべての音節構造で、松山市・今治市の若年層、共通語（1960）・共通語（2014）すべてにおいて、無核の比率が高く、大きな違いがないことがわかる。小川晋史（2010）においても、すべての音節構造で、この結果と同じく、無核になる傾向を述べている。

この結果は、〈下げ核〉の有無（位置）に音節構造が関与する3拍語とは異なり、4拍語では、〈下げ核〉の有無（位置）に、音節構造が関与しないことを示唆している。松山市・今治市（京都方言）の老年層において、3・4拍語ともに、無核語は、H0型となるかそれともL0型となるか、型の決定（〈式〉の決定）に音節構造が関与していること（秋山英治（2018））から考えると、松山市・今治市の老年層は、老年層より、音節構造の関与が弱い。上述したように、松山市・今治市において2字漢語は老年層・若年層ともに、〈下げ核〉の有無（位置）が基本的に同じであり、その差が、〈式〉の有無にあるということからいえば、共通語化によって〈式〉が消失することにともない、音節構造の関与が弱まったということになる。仮に、松山市・今治市の老年層・若年層における〈下げ核〉の有無（位置）が、京都方言・共通語と基本的に同じであるということから、松山市・今治市の老年層と若年層の関係を、京都方言と共通語の関係として読み替えると、2字漢語における京都方言と共通語の違いは、〈式〉の有無によって生じる音節構造の関与の差と捉えることができる。鹿児島方言・長崎方言のトーンの決定に音節構造が関与している（秋山英治（2018））ということも併せて考えると、外来語と同様に、漢語（2字漢語）においても「全国的に同じような規則に従う」（松森晶子（2002））、つまり「音節構造（の関与）」という1つの観点から考察することができるのではないだろうか。

そこで、松山市・今治市の老年層と若年層、共通語、京都方言、鹿児島方言、長崎方言について、「音節構造の関与」という観点からまとめてみたのが、以下の【表8】である。

【表7】4拍語・音節構造別

		有 核			無 核	合 計
		1型	2型	3型	H0型	
松 山	重#重	14	1	11	122	148
		9.5%	0.7%	7.4%	82.4%	100.0%
	重#輕輕	8	0	0	30	38
		21.1%	0.0%	0.0%	78.9%	100.0%
	輕輕#重	3	5	1	30	39
		7.7%	12.8%	2.6%	76.9%	100.0%
輕輕#輕輕	0	0	0	9	9	
		0.0%	0.0%	0.0%	100.0%	100.0%
今 治	重#重	15	0	7	127	149
		10.1%	0.0%	4.7%	85.2%	100.0%
	重#輕輕	4	2	10	42	58
		6.9%	3.4%	17.2%	72.4%	100.0%
	輕輕#重	1	4	2	31	38
		2.6%	10.5%	5.3%	81.6%	100.0%
輕輕#輕輕	1	0	0	8	9	
		11.1%	0.0%	0.0%	88.9%	100.0%
共通語 1960	重#重	8	0	5	133	146
		5.5%	0.0%	3.4%	91.1%	100.0%
	重#輕輕	7	0	0	42	49
		14.3%	0.0%	0.0%	85.7%	100.0%
	輕輕#重	1	3	2	34	40
		2.5%	7.5%	5.0%	85.0%	100.0%
輕輕#輕輕	2	0	0	7	9	
		22.2%	0.0%	0.0%	77.8%	100.0%
共通語 2014	重#重	10	0	7	134	151
		6.6%	0.0%	4.6%	88.7%	100.0%
	重#輕輕	9	0	0	41	50
		18.0%	0.0%	0.0%	82.0%	100.0%
	輕輕#重	1	4	2	34	41
		2.4%	9.8%	4.9%	82.9%	100.0%
輕輕#輕輕	2	0	0	7	9	
		22.2%	0.0%	0.0%	77.8%	100.0%

【表8】2字漢語における音節構造の関与

	松山・今治 老年層	京都	鹿児島	長崎	共通語	松山・今治 若年層
<式> (トーン)	○	△	△	△	×	×
<下げ核>	△	△	×	×	△	△

- 3・4拍語ともに関与が認められる  
 △ 3・4拍語のどちらかに関与が認められる  
 × 3・4拍語ともに関与が認められない

【表8】より、松山市・今治市の老年層や京都方言のように、〈式〉と〈下げ核〉が弁別的な特徴の地域では、〈式〉と〈下げ核〉ともに音節構造の関与が認められ、鹿児島方言・長崎方言のように、トーンが弁別的な特徴の地域では、トーンに音節構造の関与が認められ、共通語や松山市・今治市の若年層のように、〈下げ核〉が弁別的な特徴の地域では、〈下げ核〉に音節構造の関与が認められる。地域によって、関与の度合いが異なるものの、すべての地域においてアクセント弁別にかかる要素に、音節構造が関与しているということになる。

その他、4拍語では、個々の語に地域的特徴もみられる。今治市の老年層では、「高圧」「参列」「出発」などの語が、H0型とH3型の2つの型を併用している。このうち、H0型は、松山市（京都方言）にもみられる型であるが、H3型は、松山市（京都方言）にはみられない、今治市特有の型である。すべての語に対応しているということではないが、今治市の若年層において、このH3型（若年層では、〈式〉を消失している（曖昧化している）ことから、3型）がみられており、地域的特徴が保持されている。さらに、今治市の若年層では、老年層ではH0型のみの語においても、0型・3型がみられる。また、老年層ではL3型との併用がまれなL0型の語において、若年層では、0型・3型の併用がみられる。秋山英治（2018）の老年層ではそれほど多く確認されていないが、もともと今治市において、H0型とH3型の併用、L0型とH3型の併用が地域的特徴としてみられていたことから、若年層においてもこれらの併用が保持されたのであろう。

## 5. おわりに

以上、共通語化によって〈式〉を消失している（曖昧化している）松山市・今治市の若年層の2字漢語について、〈式〉を有する老年層の調査結果（秋山英治（2018））、また共通語（共通語（1960）・共通語（2014））との比較分析をおこなった。

その結果、〈下げ核〉の有無（位置）が、松山市・今治市の若年層、松山市・今治

市（京都方言）の老年層、共通語で、基本的に同じであることが明らかになった。さらに、音節構造別に分析したところ、〈下げ核〉の有無（位置）について、従来指摘されていた、後部要素の拍数によるのではなく、音節構造が関与している可能性が考えられることが明らかになった。田中真一（2008）では、共通語の外来語・複合名詞において、音節構造が関与していることを指摘しているが、愛媛県東中予方言において、音節構造の関与が、漢語以外の語種にも認められるか、また認められる場合、どの程度認められるのか、今後、外来語など漢語以外の調査・分析を進めていく必要がある。

繰り返して述べてきたように、松山市・今治市の2字漢語は、もともと老年層の段階で、〈下げ核〉の有無（位置）が共通語と同じである。しかし、老年層の段階で、共通語化と違う語もあり、それらを見ると、若年層で共通語化を起している語がある。語によって、共通語化の進行状況が異なることから、老年層において松山市・今治市ともに同じ型で、若年層において松山市・今治市ともに共通語化を起した（共通語と同じ型である）ことが確認できる語をあげると、以下のようになる（併用の場合も含む）。

3拍語	老年層		若年層
市立（シリツ）	L0型	→	1型
自由（ジユウ）	H1型	→	2型
4拍語	老年層		若年層
愛嬌（アイキョウ）	H1型	→	3型
中央（チュウオウ）	L0型	→	3型

※松山市の老年層は、L0型とH0型の併用。

日数（ニッスウ）	L0型	→	3型
----------	-----	---	----

※共通語は、3型と0型の併用。

日本（ニッポン）	H1型	→	3型
----------	-----	---	----

日曜（ニチヨウ）	H0型	→	3型
----------	-----	---	----

※共通語は3型と0型の併用。松山市の若年層は3型と1型の併用。

中国（チュウゴク）	L2型	→	1型
-----------	-----	---	----

※今治市の若年層は2型と1型の併用。

3拍語よりも4拍語が多く、4拍語では「中国」を除いてすべてが3型への変化である。3型へ変化した語について、音節構造をみると、「日曜」（輕輕#重）を除いてすべてが「重#重」である。全体をみても、「市立」（軽#輕輕）を除いてすべてに

「重」が含まれており、共通語化において、音節構造（「重」を含むかどうか）が強く関与していることを示唆している。このことから、愛媛県東中予方言の2字漢語において、音節構造が強く関与していることが理解できよう。

## 注

- 1) 類の対立関係でみると、共通語と同じ（1／2・3／4・5）であるが、本稿でとりあげた松山市・今治市の若年層では、第4・5類に2型がみられており、共通語と型が異なる。秋山英治（2017a）において、松山市の若年層は、類の対立関係・型ともに、共通語と同じになったということ述べたが、調査を進めると、第4・5類に2型がみられる話者も確認される。共通語化しているという点では、同じであるが、どの型をとるかという点で、共通語と同じタイプ、そしてやや異なる型をとるタイプ（第4・5類に2型がみられるタイプ）の両タイプがある可能性がある。この点については、今後、若年層の調査話者数を増やして確認する必要がある。
- 2) 調査語彙は、松浦年男（2009）でとりあげている384語から370語を抽出したものである。調査では、前部要素・後部要素にわたっての調査はしていない。分析にあたっては、1つの語に複数の型がみられる（型が揺れている）場合、それぞれを1語と扱った。以上は、秋山英治（2018）と同じである。
- 3) 金田一春彦（1980）や奥村三雄（1955・1961・1963・1964・1974・1981・1990）によって、漢語にも和語に準じる類別語彙があることが知られているが、この漢語類別語彙について、諸方言間の対応を示す語彙表として使用できるものかを検討した秋山英治（2017b）では、認定できる可能性が高い（その類の語として認定できる語が多い）類として、2拍語では、第1・3・4類、3拍語では、第1・4・6類であることを述べた。平安時代末期頃の京都方言の型は、2拍語では、第1類がH0型、第3類がL0型（低平調）、第4類がL0型（上昇調）、3拍語では、第1類がH0型、第4類がL0型（低平調）、第6類がL0型（上昇調）と考えられており、〈式〉の違いはあるものの、すべて無核である。「医者」（第1類H0型）など2字漢語（1+1）もあるものの、大半が1字漢語の2拍語と、大半が2字漢語（「不思議」（第1類H0）のように、1+1+1の3字漢語も一部ある）の3拍語というように、語構成が異なっていながら、2・3拍語間で対応関係がみられる。さらに、これらの類のうち、2拍語第1・4類、3拍語第1・6類は、現代京都方言において平安時代末期頃と同じ型であり、共通語においても無核語で共通性がみられる。これらの事実、漢語類別語彙を認定するか（認定した場合の類・型はどういうものか）という問題とも関係していることであるが、外来語だけでなく漢語においても「全国的に同じような規則に従う」（松森晶子（2002））可能性があるのかということを検証する上で、重要な事例となろう。
- 4) 小川晋史（2010）では、共通語（東京方言）だけでなく、京都方言・鹿児島方言をとりあげ、これら3方言の関係性についても報告している。
- 5) 【表1】～【表7】では、各地域の上段が語数、下段が当該地域における比率を示している。
- 6) 「輕輕#軽」は語数が少なく、少しの差であっても、比率にすると大きな差になってしまうため、慎重に分析する必要がある。なお、今治市の老年層においても、「輕輕#軽」では、有核の比率が松山市の老年層、京都方言より高く、若年層と同じ結果となっている（秋山英治（2018））。
- 7) 秋山英治（2018）では、松山市・今治市と京都方言の比較、つまり現代方言の比較から、もともと前部要素に促音を含む場合、低起系列の〈式〉、促音を含まない場合、高起系列の〈式〉であったと述べた。しかし、前部要素に促音を含む語が、入声始まりの語であるということから考えると、もともと高起系列の〈式〉であったと考えることについて、検討が必要である。この点については、今後の課題としたい。
- 8) 2拍の漢語は、漢語類別語彙を検討するために調査したものの（秋山英治（2017b））が中心で、約350語である。

9) 田中真一 (2008) によれば、特殊拍において、「二重母音 i → 長音 → 撥音 → 促音」の順に自立性が低くなるという階層性があり、「自立性が低いほどアクセント生成が不安定になり、反対に、それが高いほど安定した生成が行われる」ことを述べている。しかし、松山市・今治市の若年層、また松山市・今治市 (京都方言) の老年層において、促音を除く特殊拍に、田中真一 (2008) のいう階層性は認められなかった。松山市・今治市の若年層、また松山市・今治市 (京都方言) の老年層では、田中真一 (2008) の階層として 2 番目に低い撥音に、もっとも 1 型 (H1) が多くあらわれ、むしろ田中真一 (2008) の指摘と逆の傾向が認められた。

## 引用文献

- 秋山英治 (2017a) 『愛媛県東中予方言のアクセントと共通語のアクセントー日本語史再建のためにー』おうふう
- 秋山英治 (2017b) 「漢語類別語彙の検討」『2017 (平成29) 年度第31回 日本音声学会全国大会予稿集』 pp. 25-30
- 秋山英治 (2018) 「愛媛県東中予方言における 2 字漢語のアクセント」『愛媛大学法文学部論集 人文学編』 44, pp. 105-134
- 小川晋史 (2006) 「京都方言 2 字漢語のアクセント」『音韻研究』 9, pp. 91-97
- 小川晋史 (2010) 「日本語の諸方言における二字漢語のアクセントー単純語と複合語の狭間でー」『漢語の言語学』 くろしお出版, pp. 77-90
- 奥村三雄 (1955) 「東西アクセント分離の時期ー外来語のアクセントー」『国語国文』 24-12, pp. 34-44
- 奥村三雄 (1961) 「漢語のアクセント」『国語国文』 30-1, pp. 1-16
- 奥村三雄 (1963) 「漢語のアクセントーアクセントから語彙論へー」『国語学』 55, pp. 36-53
- 奥村三雄 (1964) 「漢語アクセントの一性格」『国語国文』 33-2, pp. 48-68
- 奥村三雄 (1974) 「諸方言アクセント分派の時期ー漢語アクセントの研究ー」『方言学研究叢書 3』, pp. 1-38
- 奥村三雄 (1981) 『平曲譜本の研究』 桜楓社
- 奥村三雄 (1990) 『方言国語史研究』 東京堂出版
- 金田一春彦 (1980) 「味噌よりは新しく茶よりは古いーアクセントから見た日本祖語と字音語ー」『言語』 9-4, pp. 88-98
- 金田一春彦監修・秋永一枝編 (2014) 『新明解日本語アクセント辞典 第2版』 三省堂
- 田中真一 (2008) 『リズム・アクセントの「ゆれ」と音韻・形態構造』 くろしお出版
- 平山輝男編 (1960) 『全国アクセント辞典』 東京堂出版 (26版)
- 松浦年男 (2009) 「長崎方言における二字漢語のアクセント型」『九州大学言語学論集』 30, pp. 29-58 (松浦年男 (2014) 『長崎方言からみた語音調の構造』 ひつじ書房に再録)
- 松浦年男 (2014) 『長崎方言からみた語音調の構造』 ひつじ書房
- 松森晶子 (2002) 「音韻 (理論・現代)」『国語学』 211号, pp. 61-72

## 附記

調査において、話者の方をはじめ、話者の方をご紹介くださった方など、多くの方にお世話になりました。個人情報から、お名前をあげることは控えますが、ご協力いただきました皆様に心よりお礼申し上げます。

本研究は、JSPS 科研費「芸予諸島方言におけるアクセントの研究」(17K02733) の助成を受けたものです。

## 資料編

資料編として、末尾に、松山市の若年層（O・T氏、1994年生まれ）・今治市の若年層（S・Y氏、1996年生まれ）、平山輝男編（1960）所収の共通語（東京）（本稿の「共通語（1960）」）、金田一春彦監修・秋永一枝編（2014）の共通語（本稿の「共通語（2014）」）のデータを示す。また、本稿では、松山市・今治市の老年層と比較したことから、秋山英治（2018）で示した、松山市の老年層（W・H氏、1950年生まれ）・今治市の老年層（N・S氏、1943年生まれ）、平山輝男編（1960）所収の京都方言・鹿児島、松浦年男（2009）所収の長崎方言のデータも併せて示す。なお、秋山英治（2018）で示したデータにおいて、共通語の「絶頂」「日数」に誤植があったことから、訂正したデータを示した。

データは、拍数、語、読み、音節構造、各地域・年代（松山市若年層・今治市若年層・共通語（平山輝男（1960））・共通語（金田一・秋永（2014））・松山市老年層・今治市老年層・京都・鹿児島・長崎の順）の型の順に示す。

型の表記は、本稿の「2. 調査の概要」で示した表記を用いる。その他、話者の疑問を「?」、筆者の疑問を「\$」で表す。型が揺れている場合は、「1, 2」のように示す。

秋 山 英 治

拍数	語	読み	音節構造	松山	今治	共通語	共通語	松山	今治	京都	鹿児島	長崎
				0・T 1994年生	S・Y 1996年生	平山輝男 (1960)	金田一・秋本 (2014)	W・H 1950年生	N・S 1943年生	平山輝男 (1960)	平山輝男 (1960)	松浦年男 (2009)
4	愛嬌	アイキョウ	重#重	3	3	3	3	H1	H1	H1	B	B
4	愛犬	アイケン	重#重	0	0	0	0	L0	H0	L0	B	B
4	愛好	アイコウ	重#重	3	0	0	0	H0	H0	H0	B	B
4	愛国	アイコク	重#軽軽	0	0	0	0	L0	H0	L0	B	B
4	愛妻	アイサイ	重#重	0	0	0	0	L0	H0	H0	B	B
4	愛人	アイジン	重#重	0	0	0	0	L0	H0	H0	B	B
4	愛憎	アイゾウ	重#重	0	0	0	0	L0	H0	H0	B	B
3	運河	ウンガ	重#軽	1	1	1	1	H1	H1	H1	A	A
4	連休	ウンキユウ	重#重	0	3,0	0	0	L0	H2,H0	H0	A	A
4	運行	ウンコウ	重#重	0	0	0	0	H0	H0,L0	H0	A	B
4	運勢	ウンセイ	重#重	1	1	1	1	H1	H1	L2	A	A
4	運送	ウンソウ	重#重	0	0	0	0	H0	L0	H0	A	B
4	運賃	ウンチン	重#重	1	1	1	1	H1	H1	L2	A	B
4	運転	ウンテン	重#重	0	0	0	0	H0	H0	H0	A	B
4	運動	ウンドウ	重#重	0	0	0	0	H0	H0	H0	A	B
3	運輸	ウンユ	重#軽	1	0	1,0	0,1	H1	L2	L0	A	A
4	運用	ウンヨウ	重#重	0	0	0	0	H0	H0	H0	A	B
3	王位	オウイ	重#軽	1	1	1	1	H1	L2	H1	B	A
4	王冠	オウカン	重#重	0	0	0	0	L0	L0	H0	B	B
4	王宮	オウキユウ	重#重	0	0	0	0	L0	L0	H0	B	B
4	王国	オウコク	重#軽軽	0	0	0	0	L0	L0	H0	B	A*
3	王座	オウザ	重#軽	1	1	1	1	H1	L2	H1	B	A
3	王子	オウジ	重#軽	1	1	1	1	H1	L2	L2	B	A
4	王室	オウシツ	重#軽軽	0	3,0	0	0	L0	L0	H0	B	B
4	王族	オウゾク	重#軽軽	0	3,0	0	0	L0	L0	H0	B	B*
4	王道	オウドウ	重#重	0	0	0	0	L0	L0	H0	B	B
3	王妃	オウヒ	重#軽	1	1	1	1	H1	?L0	H1	B	A
3	開花	カイカ	重#軽	1	1	1	0,1	L0	L0	H1	B	B
4	開会	カイカイ	重#重	0	0	0	0	H0	H0	H0	B	B
4	開館	カイカン	重#重	0	0	0	0	H0	H0	H0	B	B
4	開業	カイギョウ	重#重	0	0	0	0	H0	H0	H0	B	B
4	開口	カイコウ	重#重	0	0	-	0	H0	H0	-	-	B
4	開催	カイサイ	重#重	0	0	0	0	H0	H0	H0	B	B
3	開始	カイシ	重#軽	0	0	0	0	L0	L0	L0	B	B
3	開示	カイジ	重#軽	0	0	-	0,1	L0	L0	-	-	B
4	開拓	カイタク	重#軽軽	0	0	0	0	H0	H0	H0	B	B
4	開通	カイツウ	重#重	0	0	0	0	H0	H0	H0	B	B
4	開店	カイテン	重#重	0	0	0	0	H0	H0	H0	B	B
4	開発	カイハツ	重#軽軽	0	0	0	0	H0	H0	H0	B	B
4	開閉	カイヘイ	重#重	0	1	0	0	H0	H0	H0	B	B
4	開幕	カイマク	重#軽軽	0	0	0	0	H0	H0	H0	B	B
3	加害	カガイ	軽#重	1,0	0	0	0	L0	L0	L0	A	B*
3	加減	カゲン	軽#重	0	0	0	0	H0	H0	H0	B	B
3	加工	カコウ	軽#重	0	0	0	0	L0	L0	L0	A	B
3	加算	カサン	軽#重	0	0	0	0	L0	L0	L0	A	B
3	加勢	カセイ	軽#重	0	0	0	0	L0	L0	L0	B	B
3	加担	カタン	軽#重	0	0	0	-	L0	L0	L0	A	B
3	加熱	カネツ	軽#軽軽	0	0	0	0	L0	L0	L0	A	B
3	加筆	カヒツ	軽#軽軽	0	0	0	0	L0	L0	L0	A	B
3	加法	カホウ	軽#重	1	1	1,0	1,0	H1	?H1	H1	A	B
3	加盟	カメイ	軽#重	0	0	0	0	L0	L0	L0	A	B
3	記憶	キョク	軽#軽軽	0	0	0	0	L0	H1	H0	A	B
3	記号	キゴウ	軽#重	0	0	0	0	H0	H0	H0	A	B

愛媛県東中予方言における2字漢語アクセントの世代差

拍数	語	読み	音節構造	松山	今治	共通語	共通語	松山	今治	京都	鹿児島	長崎
				0・T 1994年生	S・Y 1996年生	平山輝男 (1960)	金田一・秋本 (2014)	W・H 1950年生	N・S 1943年生	平山輝男 (1960)	平山輝男 (1960)	松浦年男 (2009)
3	記載	キサイ	軽#重	0	0	0	0	L0	L0	L0	A	B
3	記述	キジュツ	軽#軽軽	0	0	0	0	L0	L0	H1	A	B
3	記帳	キチャウ	軽#重	0	0	0	0	L0	L0	L0	A	B
3	記入	キニユウ	軽#重	0	0	0	0	L0	L0	L0	A	B
3	記念	キネン	軽#重	0	0	0	0	L0	H1	H1	A	B
4	共学	キョウガク	重#軽軽	0	0	0	0	H0	H0	H0	A	B
4	共感	キョウカン	重#重	0	0	0	0	H0	H0	H0	A	B
4	共済	キョウサイ	重#重	0	1	0	0	H1	H1	H0	A	B
4	共催	キョウサイ	重#重	0	0	0	0	H0	H0	H0	A	B
4	共存	キョウソ(ソ)ン	重#重	0	0	0	0	H0	H0	H0	A	B
4	共犯	キョウハン	重#重	0	0	0	0	H0	H0	H0	A	B
4	共謀	キョウボウ	重#重	0	0	0	0	H0	H0	H0	A	B
4	共鳴	キョウメイ	重#重	0	0	0	0	H0	H0	H0	A	B
4	共有	キョウユウ	重#重	0	0	0	0	H0	H0	H0	A	B
4	共用	キョウヨウ	重#重	0	0	0	0	H0	H0	H0	A	B
3	軍医	グンイ	重#軽	1	1	1	1	H1	L2	L2	B	A
3	軍歌	グンカ	重#軽	1	1	1	1	H1	H1	H1	B	A
4	軍艦	グンカン	重#重	0	0,3	0	0	L0	L0	L0	B	B
4	軍人	グンジン	重#重	0	0	0	0	L0	L0	L0	B	B
4	軍隊	グンタイ	重#重	1	1	1	1	H1	H1	H1	B	A
4	軍閥	グンバツ	重#軽軽	0	0	0	0	\$H0	L0	H1	B	B
3	軍務	グンム	重#軽	1	1	1	1	H1	H1	H1	B	A
4	軍律	グンリツ	重#軽軽	0	0	0	0,1	\$H0	L0	H0	B	B
4	軍令	グンレイ	重#重	0	0	0	0	H0	L0	H0	B	B
4	高压	コウアツ	重#軽軽	0	3,0	0	0	H0	H3,H0	H0	B	B
3	高位	コウイ	重#軽	1	1	1	1	H1	H1	H1	B	A
4	高温	コウオン	重#重	0	0	0	0	H0	H0	H0	B	B
3	高価	コウカ	重#軽	1	1	1	1	H1	H1	H1	B	A
4	高額	コウガク	重#軽軽	0	3,0	0	0	H0	H0	H0	B	B
4	高官	コウカン	重#重	0	0	0	0	H0	H0	H0	B	B
3	高貴	コウキ	重#軽	1	1	1	1	H1	H1	H1	B	A
4	高級	コウキユウ	重#重	0	0	0	0	H0	H0	H0	B	B
4	高潔	コウケツ	重#軽軽	0	0	0	0	H0	H0	H0	B	B
4	高原	コウゲン	重#重	0	0	0	0	H0	H0	H0	B	B
4	高校	コウコウ	重#重	0	0	0	0	L0	L0	L0	B	B
3	高所	コウショ	重#軽	1	1	1	1	H1	H1	H1	B	A
4	高尚	コウショウ	重#重	0	0	0	0	H0	L0	L0	B	B
4	高層	コウソウ	重#重	0	0	0	0	H0	L0	H0	B	B
4	高速	コウソク	重#重	0	0	0	0	H0	L2,H1	H0	B	B
4	高低	コウテイ	重#重	0	1	0	0	H0	H0	H0	B	B
3	高度	コウド	重#軽	1	1	1	1	H1	H1	H1	B	A
4	高等	コウトウ	重#重	0	0	0	0	L0	L0	H0	B	B
4	高騰	コウトウ	重#重	0	0	0	0	H0	H0	H0	B	B
4	高熱	コウネツ	重#軽軽	0	0	0	0	H0	H3,H0	H0	B	B
4	高齢	コウレイ	重#重	0	0	0	0	H0	H0	H0	B	B
3	作為	サクイ	軽軽#軽	1	1	1,2	1,2	H1	?H1	H1	A	A
3	作詞	サクシ	軽軽#軽	0	1	0	0	L0	?L0	H0	B	B
3	作者	サクシャ	軽軽#軽	1	1	1,0	1,古0	H1	?L0	H1	A	A
3	作図	サクズ	軽軽#軽	0	0	0	0	L0	H1	L0	B	B
4	作成	サクセイ	軽軽#重	0	0	0	0	H0	H0	H0	B	B
4	作戦	サクセン	軽軽#重	0	0	0	0	H1	H0	H0	B	B
4	作品	サクヒン	軽軽#重	0	0	0	0	L0	H0	H0	B	B
4	作風	サクフウ	軽軽#重	0	0	0	0	H0	H0	H0	B	B

秋 山 英 治

拍数	語	読み	音節構造	松山	今治	共通語	共通語	松山	今治	京都	鹿児島	長崎
				0-T 1994年生	S・Y 1996年生	平山輝男 (1960)	金田一・秋永 (2014)	W-H 1950年生	N・S 1943年生	平山輝男 (1960)	平山輝男 (1960)	松浦年男 (2009)
4	作文	サクブン	軽軽#重	0	0	0	0	L0	L0	L0	A	B
3	作家	サッカ	重#軽	0	0	0,1	0	?L0	H1	H2	A	B
3	参加	サンカ	重#軽	0	0	0,1	0,1	L0	L0	L0	A	B
3	参賀	サンガ	重#軽	1	0	1	1	H1	H1	H1	A	A
4	参会	サンカイ	重#重	0	0	0	0	H0	H0	H0	A	B
4	参画	サンカク	重#軽軽	0	0	0	0	H0	H0	H0	A	B
4	参観	サンカン	重#重	0	0	0	0	H0	H0	H0	A	B
3	参議	サンギ	重#軽	1	1	1	1	H1	H1	H1	A	B"
4	参考	サンコウ	重#重	0	0	0	0	H0	H0	H0	A	B
4	参照	サンジョウ	重#重	0	0	0	0	H0	H0	H0	A	B
4	参上	サンジョウ	重#重	0	0	0	0	H0	H0	H0	A	B
4	参戦	サンセン	重#重	0	0	0	0	H0	H0	H0	A	B
4	参堂	サンドウ	重#重	0	0	-	-	H0	H0	-	-	B
4	参入	サンニュウ	重#重	0	0	0	0	H0	H0	H0	A	B
4	参拝	サンバイ	重#重	0	0	0	0	H0	H0	H0	A	B
4	参謀	サンボウ	重#重	0	0	0	0	H0	H0	H0	A	B
3	参与	サンヨ	重#軽	1	1	1	1	H1	H1	H1	A	A
4	参列	サンレツ	重#軽軽	0	3,0	0	0	H0	H3,H0	H0	A	B
3	市営	シエイ	軽#重	0	0	0	0	L0	L0	L0	A	B
3	市外	シガイ	軽#重	0	1	1	1	H1	H1	H1	A	A
3	市場	シジョウ	軽#重	0	0	0,1	0	L0	H1,L0	L0	A	B
3	市長	シチョウ	軽#重	1	1	2	2	H1	H1	H1	A	A
3	市内	シナイ	軽#重	1	1	1	1	H1	H1	H1	A	A
3	市民	シミン	軽#重	1	1	1	1	H1	H1	H1	A	A
3	市立	シリツ	軽#軽軽	1	1	1	1	L0	L0	L0	A	B
3	自愛	ジアイ	軽#重	0	0	0	0,古1	H1	L0	H1	A	B
3	自衛	ジエイ	軽#重	0	0	0	0	L0	L0	L0	A	B
3	自害	ジガイ	軽#重	1	1	1	1	H1	H1	H1	A	B"
3	自覚	ジカク	軽#軽軽	0	0	0	0	L0	L0	L0	A	B
3	自決	ジケツ	軽#軽軽	0	0	0	0	L0	L0	L0	A	B
3	自作	ジサク	軽#軽軽	0	0	0	0	L0	L0	L0	A	B
3	自失	ジシツ	軽#軽軽	0	0	0	0	L0	L0	L0	A	B
3	自習	ジシュウ	軽#重	0	0	0	0	L0	L0	L0	A	B
3	自称	ジショウ	軽#重	0	0	0	0	L0	L0	L0	A	B
3	自信	ジシン	軽#重	0	0	0	0	H0	L0	L0	A	B
3	自炊	ジスイ	軽#重	0	0	0	0	L0	L0	L0	A	B
3	自制	ジセイ	軽#重	0	0	0	0	L0	L0	L0	A	B
3	自責	ジセキ	軽#軽軽	0	0	0	0	L0	L0	L0	A	B"
3	自説	ジセツ	軽#軽軽	0	0	0	0	L0	H1	L0	A	B
3	自足	ジソク	軽#軽軽	0	?1	0	0	L0	L0	L0	A	B"
3	自宅	ジタク	軽#軽軽	0	0	0	0	L0	L0	L0	A	B
3	自転	ジテン	軽#重	0	0	0	0	L0	L0	L0	A	B
3	自認	ジニン	軽#重	0	0	0	0	L0	L0	L0	A	B
3	自発	ジハツ	軽#軽軽	0	0	0	0	L0	L0	L0	A	B
3	自筆	ジヒツ	軽#軽軽	0	0	0	0	L0	L0	L0	A	B
3	自分	ジブン	軽#重	0	0	0	0	H0	H0	L0	B	B
3	自慢	ジマン	軽#重	0	0	0	0	L0	L0	L0	B	A"
3	自滅	ジメツ	軽#軽軽	0	0	0	0	L0	L0	L0	A	B
3	自由	ジユウ	軽#重	2	2	2	2	H1	H1	L2	B	B
3	自力	ジリキ	軽#軽軽	0	0	0	0	L0	L0	H1	A	B
3	自立	ジリツ	軽#軽軽	0	0	0	0	L0	L0	L0	A	B
4	実印	ジツイン	軽#軽#重	0	0	0	0	H0	H0	H0	B	B"
3	実家	ジッカ	重#軽	0	0	0	0	L0	L0	L0	B	B

愛媛県東中予方言における2字漢語アクセントの世代差

拍数	語	読み	音節構造	松山	今治	共通語	共通語	松山	今治	京都	鹿児島	長崎
				O・T 1994年生	S・Y 1996年生	平山舞男 (1960)	金田一・秋永 (2014)	W・H 1950年生	N・S 1943年生	平山舞男 (1960)	平山舞男 (1960)	松浦年男 (2009)
4	実感	ジツカン	重#重	0	0	0	0	L0	L0	H0	B	B
4	実況	ジツキョウ	重#重	0	0	0	0	L0	L0	H0	B	B
3	実施	ジッシ	重#軽	0	0	0	0	L0	L0	L0	B	B
3	実地	ジッチ	重#軽	0	0	0	0	L0	L0	L0	B	B
3	実母	ジツボ	軽軽#軽	1	1	1	0, 1	H1	H2, H1	H0	B	A"
4	実名	ジツメイ	軽軽#重	0	0	0	0	L0	H0	H0	B	B
3	実利	ジツリ	軽軽#軽	1	2, 1	1, 2	1	H1	L2	L2	B	A"
3	出火	シュツカ	重#軽	0	0	0	0	L0	L0	L0	B	B
3	出荷	シュツカ	重#軽	0	0	0	0	L0	L0	L0	B	B
4	出願	シュツガン	軽軽#重	0	0	0	0	H0	H0	H0	B	B
4	出勤	シュツキン	重#重	0	0	0	0	L0	H0	H0	B	B
3	出家	シュツケ	重#軽	0	0	0	0	L0	L0	H0	B	B
4	出撃	シュツゲキ	軽軽#軽軽	0	0	0	0	H0	H0	H0	B	B
4	出欠	シュツケツ	重#軽軽	0	0	0	0	L0	L0	H0	B	B
4	出血	シュツケツ	重#軽軽	0	0	0	0	L0	L0	H0	B	B
4	出現	シュツゲン	軽軽#重	0	0	0	0	H0	H0	H0	B	B
4	出港	シュツコウ	重#重	0	0	0	0	L0	H0	H0	B	B
4	出獄	シュツゴク	軽軽#軽軽	0	0	0	0	H0	H0	H0	B	B
3	出資	シュツシ	重#軽	1	0	0	0	L0	L0	L0	B	B
3	出所	シュツショ	重#軽	0	0	0, 1	0, 1	L0	L0	H0	B	B
4	出生	シュツショウ	重#重	0	0	0	0	L0	H0	H0	B	B
4	出場	シュツジョウ	軽軽#重	0	0	0	0	H0	H0	H0	B	B
4	出身	シュツシン	重#重	0	0	0	0	L0	H0	H0	B	B
3	出世	シュツセ	重#軽	0	0	0	0	L0	L0	H0	B	B
4	出征	シュツセイ	重#重	0	0	0	0	L0	H0	H0	B	B
4	出席	シュツセキ	重#重	0	0	0	0	L0	L0	H0	B	B
4	出延	シュツアイ	重#重	0	0	0	0	L0	L0	H0	B	B
3	出土	シュツド	軽軽#軽	0	1	0	0	H0	L0	H1	B	B"
4	出頭	シュツトウ	重#重	0	0	0	0	L0	L0	H0	B	B
4	出勤	シュツドウ	軽軽#重	0	0	0	0	H0	H0	H0	B	B
3	出馬	シュツバ	軽軽#軽	0	0	0	0	H0	L0	H0	B	B
4	出発	シュツパツ	重#軽軽	0	3, 0	0	0	L0	H3, H0	H0	B	B
4	出版	シュツパン	重#重	3	0	0	0	L0	H0	H0	B	B
3	出費	シュツビ	重#軽	0	0	0	0	L0	L0	L0	B	B
4	出品	シュツピン	重#重	0	0	0	0	L0	H0	H0	B	B
4	出塁	シュツライ	軽軽#重	2	0	0	0	H0	H0	H0	B	B
4	職員	シヨクイン	軽軽#重	2	2	2	2	H2	H0	H0	A	A
4	職業	シヨクギョウ	軽軽#重	2	2	2	2	H2	H2	H2	A	A
3	職種	シヨクシユ	軽軽#軽	0	0	0, 1	0, 1	H0	H1	H1	A	B"
3	職務	シヨクム	軽軽#軽	1	1	1, 2	1, 2	H2	H1	H1	A	A
4	職歴	シヨクレキ	軽軽#軽軽	0	0	0	0	H0	H0	H0	A	B
4	職権	シヨクケン	重#重	0	0	0	0	H0	L0	H0	A	B
4	職工	シヨッコウ	重#重	0	0	0	0	H0	L0	L0	A	B
4	石材	セキザイ	軽軽#重	2	2	0	0, 2	H0	H0	H1	A	A
4	石像	セキゾウ	軽軽#重	0	0	0	0	H0	H0	H0	A	A
4	石炭	セキタン	軽軽#重	2	3	3	3	H1	H2, H1	H1	A	B
4	石版	セキバン	軽軽#重	0	0	0	0	H0	H0	H0	A	A
4	石盤	セキバン	軽軽#重	0	0	0	0	H0	H0	H0	A	B"
3	石碑	セキヒ	軽軽#軽	0	0	0	0	L0	L0	H0	A	A
4	石墨	セキボク	軽軽#重	0	0	0	0	H0	H0	L0	A	B
3	石油	セキユ	軽軽#軽	0	0	0	0	L0	H0	L0	A	B"
4	石灰	セキカイ	重#重	1	0	1	1	H1	L0	L0	A	A
3	石器	セッキ	重#軽	0	0	0	0	L0	L0	L0	A	B"

秋 山 英 治

拍数	語	読み	音節構造	松山	今治	共通語	共通語	松山	今治	京都	鹿児島	長崎
				0-T 1994年生	S・Y 1996年生	平山輝男 (1960)	金田一・秋本 (2014)	W-H 1950年生	N・S 1943年生	平山輝男 (1960)	平山輝男 (1960)	松浦年男 (2009)
4	石鯨	セッケン	重#重	3	0	0	0	H1	H0	H0	A	B
4	石膏	セッコウ	重#重	0	0	0	0	L0	L0	L0	A	B
4	絶縁	ゼンエン	軽#重	0	0	0	0	H0	H0	H0	A	B
4	絶海	ゼツカイ	重#重	0	0	0	0	L0	L0	H0	A	A"
4	絶景	ゼツケイ	重#重	0	0	0	0	L0	L0	H0	A	B
4	絶好	ゼツコウ	重#重	0	0	0	0	L0	L0	H0	A	B
4	絶交	ゼツコウ	重#重	0	0	0	0	L0	L0	H0	A	B
4	絶賛	ゼツサン	重#重	0	0	0	0	L0	L0	H0	A	B
4	絶大	ゼツダイ	軽#重	0	0	0	0	H0	H0	H0	A	B
4	絶頂	ゼツチョウ	重#重	0	0	0,3	0,3	L0	L0	H0	A	B
4	絶版	ゼツパン	重#重	0	0	0	0	L0	L0	H0	A	B
4	絶筆	ゼツピツ	重#軽	0	0	0	0	L0	L0	H0	A	B
4	絶壁	ゼツベキ	重#軽	0	0	0	0	L0	L0	H0	A	B
4	絶望	ゼツボウ	軽#重	0	0	0	0	L0	H0	H0	A	B
3	絶無	ゼツム	軽#軽	1	1	1	1	L2	H1	H1	A	B
4	絶命	ゼツメイ	軽#重	0	0	0	0	L0	H0	H0	A	B
4	絶滅	ゼツメツ	軽#軽	0	0	0	0	L0	H0	H0	A	B
3	大火	タイカ	重#軽	1	1	0,1	0,新1	H1	H1	H1	A	A
3	大河	タイガ	重#軽	1	1	1	1	H1	H1	H1	A	A
4	大会	タイカイ	重#重	0	0	0	0	H0	L0	H0	A	B
3	大気	タイキ	重#軽	1	1	1	1	H1	H1	H1	A	A
4	大金	タイキン	重#重	0	0	0	0	H0	L0	H0	A	B
4	大群	タイグン	重#重	0	0	0	0	H0	L0	H0	A	B
3	大差	タイサ	重#軽	1	1	1	1	H1	H1	H1	A	A
4	大衆	タイシュウ	重#重	0	0	0	0	H0	H0	H0	A	B
4	大正	タイショウ	重#重	0	0	0	0	H0	H0	H0	B	B
4	大食	タイシヨク	重#軽	0	3,0	0	0	H0	L0	L0	A	B
4	大切	タイセツ	重#軽	0	0	0	0	L0	L0	L0	B	A
4	大戦	タイセン	重#重	0	0	0	0	H0	H0	H0	A	B
4	大敵	タイテキ	重#軽	0	0	0	0	H0	L0	H0	A	B
3	大破	タイハ	重#軽	1	1	1	1	H1	H1	H1	A	A
4	大敗	タイハイ	重#重	0	0	0	0	H0	H0	H0	A	B
4	大半	タイハン	重#重	3	0	0	0,3	H0	H0	H0	A	B
4	大変	タイヘン	重#重	0,3	0	0	0	L0	L0, L4	L0	A	A"
4	大砲	タイホウ	重#重	1	?1	0	0	L0	L0	L0	A	A
4	大役	タイヤク	重#軽	0	0	0	0	H0	L0	H0	A	B"
4	大洋	タイヨウ	重#重	2,1	3,1	0	0	L2	L2	H0	A	A"
4	大陸	タイリク	重#軽	0	0	1,0	0,古1	L0	L0	L0	A	B"
4	大量	タイリョウ	重#重	0	0	0	0,3	L0	L0	H0	A	B
4	中央	チュウオウ	重#重	3	3	3,0	0,3	L0	L0	L2	A	B
4	中核	チュウカク	重#軽	1	0	0	0	L0	L0	L0	A	B
4	中学	チュウガク	重#軽	1	2,1	1	1	\$H1, L2	L2	L2	A	A
4	中間	チュウカン	重#重	0	0	0	0	L0	L0	L0	A	B
4	中級	チュウキョウ	重#重	3	0	0	0	L0	L0	L0	A	B
4	中継	チュウケイ	重#重	0	0	0	0	H0	L0	L0	A	B
4	中元	チュウゲン	重#重	1	1	0	0	L0	L0	L0	A	B
3	中古	チュウコ	重#軽	0	0	1	0,1	L0	L0	L2	A	B
4	中国	チュウゴク	重#軽	1	2,1	1	1	L2	L2	L2	A	A
3	中座	チュウザ	重#軽	0	?1	0	0	L0	L0	L0	A	B
3	中止	チュウシ	重#軽	0	0	0	0	L0	L0	L0	A	B
4	中軸	チュウジク	重#軽	0	0	0	0	L0	L0	L0	A	B
4	中秋	チュウシュウ	重#重	0	1	0	0	H0	L0	L0	A	B
4	中傷	チュウショウ	重#重	0	0	0	0	L0	L0	L0	A	B

愛媛県東中予方言における2字漢語アクセントの世代差

拍数	語	読み	音節構造	松山	今治	共通語	共通語	松山	今治	京都	鹿児島	長崎
				0・T 1994年生	S・Y 1996年生	平山輝男 (1960)	金田一・秋本 (2014)	W・H 1950年生	N・S 1943年生	平山輝男 (1960)	平山輝男 (1960)	松浦年男 (2009)
4	中小	チュウシヨウ	重#重	?1	0	-	1	H1	L3	-	-	A"
4	中心	チュウシン	重#重	0	0	0	0	L0	L0	L0	A	B
4	中世	チュウセイ	重#重	1	1	1	1	H1	H1	L2	A	A
4	中性	チュウセイ	重#重	0	0	0	0	L0	L0	L0	A	A"
4	中東	チュウトウ	重#重	0	0	0	0	L0	L0	L2	A	B
4	中等	チュウトウ	重#重	1	0	0	0	L0	L0	L0	A	B
4	中毒	チュウドク	重#軽軽	1	1	1	1	H1	H1	H1	A	A
4	中年	チュウネン	重#重	0	0	0	0	L0	L0	L0	A	B"
4	中盤	チュウバン	重#重	0	0	0	0	L0	L0	L0	A	B
3	中部	チュウブ	重#軽	1	1	1	1	H1	H1	L2	A	A
4	中腹	チュウフク	重#軽軽	0	0	0	0	H0	L0	L0	A	B
4	中立	チュウリツ	重#軽軽	0	0	0	0	L0	L0	L0	A	B
4	中略	チュウリヤク	重#軽軽	1	0	0,1	1,0	H1	L0	L0	A	B
4	中流	チュウリュウ	重#重	0	0	0	0	L0	L0	L0	A	B
3	中和	チュウワ	重#軽	0	0	0	0	L0	L0	L0	A	B
3	天下	テンカ	重#軽	1	1	1	1	H1	H1	H1	A	A
3	天気	テンキ	重#軽	1	1	1	1	H1	H1	H1	A	A
4	天災	テンサイ	重#重	0	0	0	0	H0	H0	H0	A	B
4	天職	テンシヨク	重#軽軽	1	0	0	1	H1	H1	H1	A	A
4	天体	テントタイ	重#重	0	0	0	0	H0	?H0	H0	A	B
3	天女	テンニョ	重#軽	1	1	1	1	H1	H1	H1	A	A
4	日銀	ニチギン	軽軽#重	0	2	0	0	L0	L0	L0	B	A"
3	日時	ニチジ	軽軽#軽	1	1	1,2	1,古2	H1	H1	H1	B	A"
4	日常	ニチジョウ	軽軽#重	0	0	0	0	H0	H0	H0	B	B
4	日独	ニチドク	軽軽#軽軽	0	0	1	1	H2	H1	H1	B	A"
4	日仏	ニチフツ	軽軽#軽軽	0	1	1	1	H2	H1	H1	B	A
4	日米	ニチベイ	軽軽#重	1	1	1	1	H1	H1	H1	B	A
4	日没	ニチボツ	軽軽#軽軽	0	0	0	0	L0	H0	H0	B	B
3	日夜	ニチヤ	軽軽#軽	1	1	1,2	1,古0	H1	H1	H1	B	A
4	日曜	ニチヨウ	軽軽#重	3,1	3	0,3	3,古0	H0	H0	H0	B	B
4	日輪	ニチリン	軽軽#重	1	0	0,2	0,2	H2	H1	H1	B	A"
3	日課	ニツカ	重#軽	0	0	0	0	L0	L0	L0	B	B
4	日刊	ニツカン	重#重	0	0	0	0	L0	L0	L0	B	B
3	日記	ニツキ	重#軽	0	0	0	0	L0	L0	L0	B	B
4	日給	ニツキユウ	重#重	0	0	0	0	L0	L0	H0	B	B"
4	日勤	ニツキン	重#重	0	0	0	0	L0	L0	H0	B	B
4	日光	ニツコウ	重#重	1	1	1	1	H1	H1	H2	B	A
4	日産	ニツサン	重#重	0	0	0	0	L0	L0	L0	B	B
3	日誌	ニツシ	重#軽	0	0	0	0	L0	H0	H0	B	B
4	日収	ニツシュウ	重#重	0	0	0	0	L0	L0	H0	B	B
4	日食	ニツシヨク	重#軽軽	0	3,0	0	0	L0	?H1	H0	B	B
4	日数	ニツスウ	重#重	3	3	3	3	L0, H0	L0	H0	B	B
4	日赤	ニツセキ	重#軽軽	0	0	0	0	L0	L0	L0	B	B
4	日中	ニツチュウ	重#重	0	0	0	0	L0	H1	L0	B	A
4	日直	ニツチヨク	重#軽軽	0	3,0	0	0	L0	L0	L0	B	B
4	日程	ニツチイ	重#重	0	0	0	0	L0	L0	L0	B	B
4	日当	ニツトウ	重#重	0	0	0	0	L0	L0	H0	B	B
4	日本	ニツポン	重#重	3	3	3	3	H1	H1	H2	B	B
3	馬脚	バキヤク	軽#軽軽	0	0	0	0	L0	L0	L0	A	B
3	馬術	バジュツ	軽#軽軽	1	1	1	1	H1	H1	H1	A	A
3	馬上	バジョウ	軽#重	0	0	0	0	L0	L0	L0	A	B
3	馬力	バリキ	軽#軽軽	0	0	0	0	H1	H1	H1	A	A
4	発案	ハツアン	軽軽#重	0	0	0	0	H0	H0	H0	B	B

秋 山 英 治

拍数	語	読み	音節構造	松山	今治	共通語	共通語	松山	今治	京都	鹿児島	長崎
				0・T 1994年生	S・Y 1996年生	平山輝男 (1960)	金田一・秋本 (2014)	W・H 1950年生	N・S 1943年生	平山輝男 (1960)	平山輝男 (1960)	松浦年男 (2009)
4	発育	ハツイク	軽軽#軽軽	0	0	0	0	H0	H0	H0	A	B
3	発火	ハツカ	重#軽	0	0	0	0	L0	L0	L0	B	B
3	発芽	ハツガ	軽軽#軽	1	0	0	0	L0	L0	L0	A	B
4	発覚	ハツカク	重#軽軽	0	0	0	0	L0	L0	L0	B	B
4	発刊	ハツカン	重#重	0	0	0	0	L0	L0	H0	B	B
3	発揮	ハツキ	重#軽	0	0	0,1	0	L0	L0	L0	B	B*
4	発掘	ハツツツ	重#軽軽	0	3,0	0	0	L0	L0	H0	A	B
4	発見	ハツケン	重#重	0	0	0	0	L0	H0	H0	B	B
4	発言	ハツゲン	軽軽#重	0	0	0	0	H0	H0	H0	B	B
4	発行	ハツコウ	重#重	0	0	0	0	L0	H0	H0	B	B
4	発酵	ハツコウ	重#重	0	0	0	0	L0	L0	H0	B	B
4	発散	ハツサン	重#重	0	0	0	0	L0	H0	H0	B	B
3	発射	ハツシャ	重#軽	0	0	0	0	L0	L0	L0	B	B
4	発信	ハツシン	重#重	0	0	0	0	L0	H0	H0	B	B
4	発声	ハツセイ	重#重	0	0	0	0	L0	H0	H0	B	B
4	発生	ハツセイ	重#重	0	0	0	0	L0	H0	H0	B	B
4	發送	ハツソウ	重#重	0	0	0	0	L0	L0	H0	B	B
4	発想	ハツソウ	重#重	0	0	0	0	L0	H0	H0	B	B
4	発注	ハツチュウ	重#重	0	0	0	0	L0	L0	H0	B	B
4	発展	ハツテン	重#重	0	0	0	0	L0	H0	H0	B	B
4	発動	ハツドウ	軽軽#重	0	0	0	0	H0	H0	H0	B	B
4	発熱	ハツネツ	軽軽#軽軽	0	0	0	0	H0	H0	H0	A	B
3	発破	ハツパ	重#軽	0	0	0	0	L0	H1	L0	A	B
4	発売	ハツバイ	軽軽#重	0	0	0	0	H0	H0	H0	B	B
4	発病	ハツビョウ	軽軽#重	0	0	0	0	H0	H0	H0	B	B
4	発表	ハツビョウ	重#重	3	0	0	0	L0	H0	H0	B	B
4	発奮	ハツブン	重#重	0	0	0	0	L0	H0	H0	B	B
4	発砲	ハツポウ	重#重	0	0	0	0	L0	H0	H0	B	B
4	発明	ハツメイ	軽軽#重	0	0	0	0	H0	H0	H0	B	B
4	発令	ハツレイ	軽軽#重	0	0	0	0	H0	H0	H0	B	B
3	発露	ハツロ	軽軽#軽	1	1	1	1	H1	H1	H1	B	A
4	別館	ベツカン	重#重	0	0	0	0	L0	L0	L0	B	B
3	別記	ベツキ	重#軽	0	1	0,1	0,1	H1	L0	L0	B	B
3	別居	ベツキョ	重#軽	0	0	0	0	L0	L0	L0	B	B
4	別人	ベツジン	軽軽#重	0	0	0	0	L0	L0	H0	B	B
4	別席	ベツセキ	重#軽軽	0	0	0	0	L0	L0	H0	B	B
4	別便	ベツビン	軽軽#重	0	0	0	0	L0	L0	L0	B	B
3	本意	ホンイ	重#軽	1	1	1	1	H1	H1	H1	A	A
4	本校	ホンコウ	重#重	1	1	0	0,1	H1	H1	H1	A	A
4	本国	ホンゴク	重#軽軽	1	1	1	1	H1	H1	H1	A	A*
3	本社	ホンシャ	重#軽	1	1	1	1	H1	H1	H1	A	A
4	本籍	ホンセキ	重#軽軽	1	0	1,0	1,0	H1	H1	H1	A	A
4	本体	ホントイ	重#重	1	1	1,0	1,0	H1	H1	H1	A	A
3	本部	ホンブ	重#軽	1	1	1	1	H1	H1	H1	A	A
4	本文	ホンブン	重#重	1	1	1	1	H1	H1	H1	A	A
4	有益	ユウエキ	重#軽軽	0	0	0	0	H0	L3, L0	H0	B	B
3	有期	ユウキ	重#軽	1	1	1	1	H1	H1	L0	B	A
4	有給	ユウキユウ	重#重	0	0	0	0	\$H0, L0	L0	H0	B	B
4	有限	ユウゲン	重#重	0	0	0	0	H0	L0	H0	B	B*
4	有毒	ユウドク	重#軽軽	0	0	0	0	H0	L0	H0	B	B*
3	有利	ユウリ	重#軽	1	1	1	1	H1	H1	H1	B	A
4	有力	ユウリョク	重#軽軽	0	0	0	0	H0	L3, L0	H0	B	B